議会図書室からのお知らせ

☑ 本のタイトルには、出版社の本の紹介のリンクが貼ってあります。
出版社での紹介がないものは貼っていません。

今月の新着図書
R８年５月（一般用）

『シリアの家族』

小松 由佳【著】/集英社 (2025/11)

ドキュメンタリー写真家である著者は、シリアで現地の男性と結婚し、内戦など数々の歴史的瞬間をくぐり抜けてきた。激動を生き抜く自身の体験とシリアの市井(しせい)の人々の等身大の姿を描くノンフィクション。

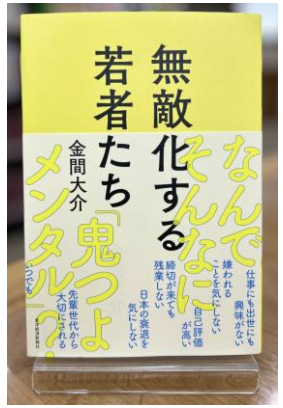
『もうコメは食えなくなるのか ～国難を乗り切るのにほんとうに大切なものとは』

鈴木 宣弘【著】/講談社 (2025/11)

著者いわく、世界中が食料危機に陥れば、日本が食料不足でも融通してもらえず、島国日本は危機に陥る。つまり「農業・食料こそ最強の国防」と訴える。国難を乗り切るための「食料安全保障」について考える。

『無敵化する若者たち』

金間 大介【著】/東洋経済新報社 (2025/12)



仕事にも出世にも興味がない、安定志向が強い、日本の衰退を気にしない。そんな若者が多いと本書は語る。若者の「いい子症候群」をリアルに描き話題となった著者が、最新の知見とデータを元に、再び若者の心理に迫る！

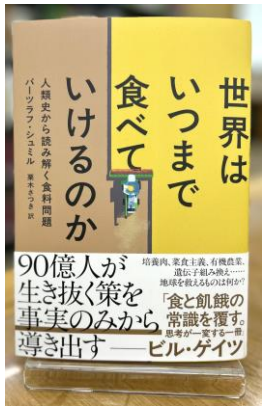
『行動経済学トレーニング ～世界のエリートが学んでいる「経済学×心理学」で人を動かす知的レッスン25』

竹林 正樹【著】/かんき出版 (2026/2)

「行動経済学」は、仕事上の問題から個人の習慣作り、人間関係の改善まで、身近な問題の解決に役立つと注目されている。そんな「行動経済学」の理論と活用法をケーススタディ形式で学べる、役立つ１冊。

『世界はいつまで食べていけるのか ～人類史から読み解く食料問題』

バーツラフ＝シュミル 【著】
栗木 さつき【訳】/NHK出版 (2025/12)



地球環境を守りながら全人類を養うことはできるのだろうか？
我々がいかに「食の基本」を誤解しているか明らかにし、我々の身体は何を必要とし、そのことが環境にどう影響を与えるかを事実から描き出す。

『体の居場所をつくる』

伊藤 亜紗【著】/朝日出版社 (2026/2)

摂食障害、ナルコレプシー、ALS、診断がつかない人、治療の道がない人、人種的マイノリティ。
11名の当事者達が、体に様々な問題を抱えながら、日々の工夫の積み重ねでどのように「体の居場所」を作ってきたかを綴る。

『「電チャリ通」から考えた地域づくり ～高校生と一緒に作った安全な町』

北村 友人・国際交通安全学会【編】/
東京大学出版会 (2025/4)

通学支援に「e-bike」がやってきた！
大阪府立豊中高等学校能勢分校は「e-bike」を導入する試みを通じて、生徒自らの地域交通安全活動や地域づくりへの参画へと繋げた。生徒と大人達が共に行動したドキュメント。

『言葉を短くする技術 ～本質を語れる人になる』

岡田 真一【著】/フローラル出版 (2025/8)

コミュニケーションに対して苦手意識を持つ人が増えている。「あの時、うまく言えなかった」「ちゃんと話は伝わってたかな？」「あんな風に言うつもりじゃなかったのに」そんなモヤモヤする会話から卒業できる１冊。

▶「働き方」に関する書籍

『静かな退職という働き方』

海老原 嗣生【著】/PHP出版 (2025/2)

「静かな退職」とは、仕事は辞めないが、最低限の業務をやるだけで積極的に仕事の意義を見出さない働き方のこと。
「静かな退職」が生まれた背景を解説し、どう対処すれば良いのかを考える。

『学校と日本社会と「休むこと」～「不登校問題」から「働き方改革」まで』

保坂 亨【著】/東京大学出版会 (2024/5)

学校や社会を取り巻く「皆勤」の空気とワークライフバランス。このままで大丈夫？教育相談に従事してきた著者が、日本社会の長時間労働と学校教育の「欠席」を結びつけて考えるようになった道筋を示し、解説する。

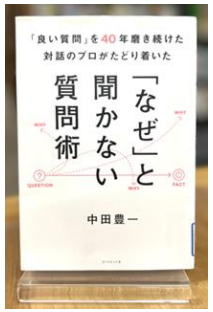
『だから、スターバックスはうまくいく。～スタバ流リーダーの教科書』

毛利 英昭【著】/総合法令出版 (2023/6)

スターバックスで働く人たちは、なぜみんな笑顔なんだろう？
そんな疑問からスタートし「人材マネジメント」の視点から、スターバックスの強さを分析。働く人もお客様も笑顔になる組織の作り方！

『「良い質問」を40年磨き続けた対話のプロがたどり着いた「なぜ」と聞かない質問術』

中田 豊一【著】/ダイヤモンド社 (2025/3)



偏見や先入観を持たず、事実のみを淡々と確認する「事実質問術」を紹介。
ビジネスの場、異文化コミュニケーションにおいても、誰もと正確に会話ができて、最速で問題を解決できるスキルが身につく実践書！

図書広報委員がおすすめする一冊

『多文化社会に生きる子どもの教育～外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』

著者：佐藤 郡衛/明石書店（2019年9月）

紹介者：大林　裕子 委員長
自由民主党・北群馬郡選出・２期

本書は、外国人の子どもたちが多く就学するようになった現在、多文化社会に生きる子どもたちの教育について、その現状と課題を検討したものです。
日本は、グローバル化の進行で多国籍化・多民族化・多文化化が進み、多文化共生に取り組んではいますが、実際には大変難しいこともわかってきました。それは群馬県も例外ではありません。
自分の意思とは関係なく親と共に来日した子どもたち、あるいは日本で生まれた子どもたちの就学、学習、進路の保障を進めるためにはどうしたらよいのか。ダブルリミテッド・バイリンガルの問題や、外国人の子どもたちが異文化の中でアイデンティティを見出し適応することがどうしたらできるのか。やはりそこには、日常的に子どもたちの母語を活かしたり、母文化を尊重する取り組みが求められると強調しています。 また、現在日本人も、海外で就学している子どもが多くなっていることもあり、国際バカロレアの展開にも言及しています。
群馬県は、市町村での母語支援員配置等の充実への予算を令和８年度として計上しています。今後に期待したいと思います。

➡ R７年度図書広報委員（10名）最後のおすすめとなります！

議会事務局政策広報課（議会図書室）